

## 窪寺俊之教授への感謝の言葉

2008年3月をもって定年退職を迎えられた窪寺俊之教授の長年に亘る関西学院大学や神学部のための御働きに対し心からの感謝を申し上げたいと思います。

先生の研究室のドアに次のように書かれた紙が貼ってあるのを日頃目にしていました。「どうぞお入り下さい。お茶の用意が来ています。」と。事実、多くの学生達が先生の研究室に出入りしていたようです。それはゼミの学生に限らず、あるいは相談をもちかける学生であったり、あるいは親しく対話を楽しむ学生であったりしたと思います。このように多くの学生達から慕われ、頼りにされていたのは先生の専門領域である牧会カウンセリングのせいばかりではなく、御自身の持つておられる人格から出てくる雰囲気学生達を魅きつけたのだと信じています。

1993年秋に先生が就任されるまでは、牧会カウンセリングやそれに類する学科目は、神学部においては開講されていなかったと記憶しています。現代の教会や学校の現場、あるいはクリスチャン・ワーカーとしてそれぞれの現場で働く場合、求められる資質の一つとして牧会的な配慮やカウンセリングの知識が必要となるのは明白であると思われまます。その意味で、先生の神学部での御働きは不可欠のものであり、今後継承していかなければならないものであることは言うまでもありません。

先生は、その専門領域においても我が国でリーダー的な役割を担ってこられました。そして、学問的にも実践的な活動においてもその役割を十分に果してこられたことは先生の業績から明白です。関西学院大学神学部が、先生の存在で広く評価され、関心を持たれるようになったことは特筆すべきことでしょう。特に、大学院における実習の重視という目的達成のために御苦労されたことは忘れることが出来ないものです。病床にある患者さん達の心理状態と若い学生達がその方々に接する際の様々な問題は実習担当者としての先生が最も御苦労されたこととうかがっていますが、そのような御苦労があって実習の成果も上がってきたのだらうと推察します。日頃温和な先生が、学生達の反省や自己省察に立ち合われる時、非常に厳しい態度で臨んでおられたともうかがっております。しかし、そのことは学生に対する深い愛情から出た教師の責任感のなせる業であったらうと思われまます。そこにも、教師でありカウンセリング指導者としての先生の真骨頂を見ることが出来るように思います。

先生は、教育の側面ばかりでなく大学や学部の行政面でも大きな働きをしてこられました。人権担当の学長補佐として大学全体の人権教育に大きな力を発揮されましたし、大学の最高決議機関である大学評議会の評議員の重責をも担い重要な役割を果されました。又、学部においては学生主任として学部の学生生活を支援、指導していく

大切な仕事をさせていただきました。多くの学生達が様々な相談に乗っていただいたことでした。特に、先生の優しい対応は問題を持った学生に心を開かせ、親身になって相談を聞いていただいたことと思いますし、そのようにして新たな希望を持って再出発した学生も多々あったことを思います。2005年から始まった学部の改革に際しては、学部長室委員のメンバーとしてこれからの神学部のありかたに一つの方向性を与えていく重要な働きをして下さいました。私達の感謝の思いは言葉では言い尽くせません。まだまだ御元気な先生が、これからも私達神学部の歩みを見守り、続けて御指導いただきたいと強く願っております。先生の御健康とお働きがこれからも守られ、祝福のうちにお過ごし下さいますことを祈念して、感謝の言葉といたします。窪寺俊之先生、本当に御苦勞様でした。有難うございました。

ここに、先生への感謝の気持ちを込めて『神学研究』を退任記念号として発刊致します。

2008年3月

神学部長 木ノ脇 悦郎